

2020年11月1日に思う

今日は、今「旬」の「脱ハンコ」について、何とも頼もしい少女のお話です。

菅政権が誕生して早や50日が過ぎ、今臨時国会で「菅政権のめざすところ」が議論されています。規制改革や行政改革を断行するとし、その目玉政策としてデジタル化の推進とともに、脱ハンコや携帯電話料金の値下げ等々が打ち出されています。もちろん、これらの政策に異論はありません。

ここで先ほどの少女の登場です。この小学校4年生の少女の研究テーマが「はんこ」です。少女は「はんこ」についての自由研究で、2019年の「図書館を使った調べる学習コンクール」で文部科学大臣賞を受賞しました。

研究の発端は「プールの授業の際、友人のプールカードに保護者の認印がなかったことにより、友人がプールに入れなかったこと」です。「はんこ」とは何か。なぜ「はんこ」がないと入れないのか。彼女の研究がはじまりました。そして、図書館や印鑑製造元を訪ねるなど、どんどん研究をすすめ、学習ノートに文や図表、絵などを用いて約50ページにわたりまとめました。その結果、この文化が残っているのが日本と台湾だけであることや、7000年の歴史があることなどを調べ、ある結論に達しました。その答えが、実に冴えています。

印鑑には、2つの役割がある。一つは「本人であることの証拠」。もう一つが「(本人の) はっきりとした(強い) 意思を表わす証拠」だと。なるほど、素晴らしい。おおいに納得のできる研究で絶賛します。

デジタル化などの大きな技術革新も、このような「なぜ」という知的好奇心とそれを探求する行動力から生まれるものだと思います。我々もおおいに彼女を見習っていききたいものです。